

# 蒼空の星コルドバの蟻地獄

藤田湘子

『春祭』所収のこの句を私は見落としていた。蒼空の星とコルドバの蟻地獄、取っ掛りがなくピンと来ない。

昼の星か、夕空の星か。見えているのは蒼空か星か、はたまた両方か。考えれば考えるほど分からなくなるが、いずれにしても天空は広い。それに対して極小の蟻地獄。二物衝撃の取り合わせは、遠から近へ、大から小へ。そして句またがり、並列のリズム。技巧のオンパレードではないか、と思えてきた。

「俳句は意味じゃない、リズムだ」と言っていた湘子の言葉を思い出した。並列された物によつて広がる時空と、リズムを楽しめばよいのであった。いつも意味で解釈しようとする私の弱点に気付かされた句。

1975年 (SSO作) 第五句集『春祭』 鑑賞・野本京